

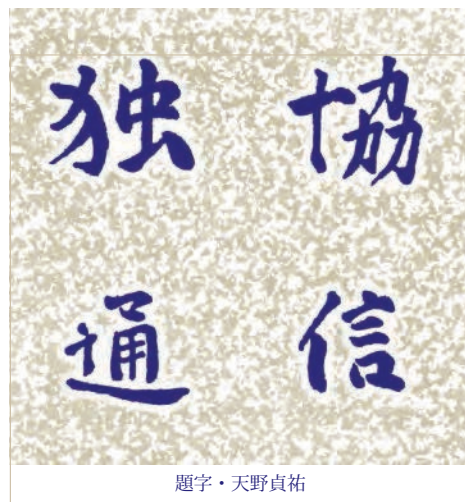
主な内容

獨協 130 周年に向けて	浅野 一	(1)
我が校・創立 130 周年 ―その歴史を振り返る―	櫻田可人	(2)
独逸学協会中学校 幕切れの五年生	畦森公望	(5)
台湾在住の同窓生からの手紙	竹内文生	(8)
6月15日(土) 総会・懇親会開催		(9)
物故者名簿		(10)
ワンダーフォーゲル部 2012 年度の活動を振り返って		(10)
ホームページでたどるワンダーフォーゲル部 OB 会	常盤雪夫	(11)
戦時下 ―柔道部員の思い出―	橋本徳朗	(12)
私の近況 卒後 10 年		(13)
クラス会だより		(14)
平成 25 年度大学別合格者数		(18)
目白だより		(18)
同窓生の皆さんへ		(19)
獨協中学・高等学校 PTA より「獨協祭・バザー用品ご寄付のお願い」	鈴木一郎	(20)
平成 25 年度 獨協祭が開催されます		(20)
編集後記		(20)

<http://www.dokkyo-mejiri.com>

獨協同窓会

検索



題字・天野貞祐

第 80 号

平成 25 年 5 月 20 日 発行

発行所 〒112-0014 東京都文京区関口 3-8-1

TEL / FAX 03 (3946) 6352 (直通)

獨協同窓会 発行責任者 浅野 一

獨協 130 周年に向けて

会長 浅野 一



本年 10 月 22 日には、獨協学園が明治 16 年 (1883) に設立されてから 130 周年の慶事を迎えることになります。

現在獨協学園は獨協中学・高等学校、獨協埼玉中学高等学校、獨協大学、獨協医科大学、姫路獨協大学、更には看護専門学校と三つの病院を併せ持つ大きな組織に発展して

おりますが、130 年の歴史の原点は言うまでもなく私どもの母校、獨協中学・高等学校であります。

母校は、渡辺校長のご指導の下、中高 6 年の一貫校として 130 年の伝統に裏打ちされた発展を遂げております。

私ども獨協同窓会では、明治 21 年 (1888) 独逸学協会学校専修科第 1 回の卒業生 13 名から本年平成 25 年 (2013) の卒業生までの名簿情報を同窓会の財産として出来る限り新鮮なデータ保有に努めております。

また、同窓会活動においても伝統の継承者に相応しい品位を大切にしていきたいと考えております。伝統の継承とは、ただ過去を引き継ぐばかりではなく、常に「今」を積み上げて変化していくことでその豊穡さ

に深みが増し、新たな伝統へとつながることに他ならないと考えています。

幸い獨協同窓会では、先輩諸氏のご努力により会報も継続的に発行されるなど多くの蓄積を背景に、時代が変化しつつある状況にも対応できるものと考えております。

昨年 6 月の役員改選に伴い会長の交代があり、新体制で 1 年が経過しようとしておりますが、初年度に取り組みました課題のうち、会務の役割分担を幹事長集中型から委員会分掌型への移行につきましては、各委員長のご努力により委員会で汗をかくて頂く多くの役員の参加を得ることができましたし、インターネットを使った情報交換 (打ち合わせ) も実行しております。更に、会計担当の独自性を確保すべく、検討会を経て会計の総点検を行い、外注先との取り決め方法などを総務委員会に提案するなど、一定の成果があったものと思います。

会務の分掌化には、まだ経験不足による周知徹底に時間を要すなどの問題はありますが、新鮮な感覚を活かして同窓会の発展に寄与するものと確信しております。

なお、会計の検討会でも指摘された課題として、会の財務基盤が弱く将来の活動のためにも、会費納入率の向上と寄付金収入の工夫が意見具申されました。今年度の総会議案で年会費増収策と財務基盤拡充の寄付金募集開始を提案させて頂いておりますので、同窓

会員各位におかれましては、ご理解・ご協力のほど宜しくお願い申し上げます。

新年度は、130周年の節目を迎えることから、母校への後援事業としての奨学金基金への寄付をはじ

め、周年事業への参加を中心に、クラブ単位の同窓会の奨励、還暦同窓会の提案など、卒業生が今まで以上に同窓会の活動に関心を持ってもらうことに取り組みながら、獨協学園全体の帰属意識が高まるような企画にもチャレンジしてみたいと考えています。

我が校・創立 130 周年 —その歴史を振り返る—

昭和 40 年卒 櫻 田 可 人

来る 10 月 22 日、我が獨協は満 130 歳を迎える。日本が近代化へ進む中、明治 16 年「獨逸学協会学校」に始まり、10 年後普通科（五年制）を「獨逸学協会学校中学」に、そして第二次世界大戦後は獨立協和の「獨協学園」へと改称された。この間、栄枯盛衰を経験し、今や 2 つの中高、2 つの大学、1 つの医大と附属看護専門学校、そして 2 つの病院と 1 つの医療センターを持つ大きな「獨協学園」へと成長して来た。この期に当たり、獨協学園のベースである我らが母校、目白・獨協中学高等学校の歴史を振り返って見ることとする。

学校」がスタートしたのである。

この本校設立の話が品川彌二郎を通じて明治天皇の耳に入るや、宮内省から 10 年間毎年 2,400 円を下賜されるという異例の恩恵を受けることとなる。初代校長には西周（哲学の父）が就任し、「三育（知育・体育・徳育）」の理念は獨協教育精神の素地となっている。

明治 17 年以降明治 20 年代、専修科（二年制）に多くのドイツ人を教師として迎えた。その中には、後のドイツ帝国宰相の Dr. ミヒャエリスがいた。彼は法学・行政学・経済学を担当し、5 年間在職して教頭も勤めており、当然獨逸学協会の会員でもある。大正 15 年 5 月、マルガレーテ夫人と共に再来日し二ヶ月間滞在、かつての同僚や生徒達と再会している。ミヒャエリス、レーマン、プツェル、スピネル、ヘーリング（学習院でも教える）、エーマン（慶応義塾でも教える）、デルブリュック兄弟、レーンホルム（教頭も勤める）、ニッポルド、ウェルニッケ等々、錚々たるメンバーを擁した専修科。この卒業生には、文官高等試験の受験資格を与えられるという高級司法官僚への道が用意されており、その多くは難関試験を突破して行政官・外交官・司法官となり、学界や財界で活躍している。

明治 20 年代、日本は近代化が確立して産業革命が始まり、ドイツ国権主義路線は定着し、日本陸軍のドイツ流近代化も成功し始めていた。政府部内長州閥の

品川彌二郎・パステル画



明治維新後、如何に日本近代化を進めて行くか苦悩していた日本政府は、欧州へ長期留学者を送り込んだ。その中、普仏戦争で勝利してドイツ帝国を築き上げたビスマルク宰相・モルトケ参謀総長らの国家哲学に魅了された品川彌二郎・青木周蔵・桂太郎・山脇玄・平田東助らは、同じく長期ドイツ留学者であった北白川宮能久親王殿下を会頭に、明治 9 年 3 月研究会「獨逸同学会」を起こした。獨協学園の始源はここにある。

明治 14 年 9 月、同メンバーらと共に西周・加藤弘之らは「日本の国体・国風に近似する立憲君主政体のドイツを学習すべき」と主唱し、蘭医や多くの山縣有朋系文武藩閥官僚を会員とした「獨逸学協会」を設立した。実力ある官僚中堅層や教師の参加が特徴であり、第一部（政治・法律・兵事）、第二部（医学・衛生）、第三部（文学・哲学・美学・農工商）と構成され、出版部も設けていた。そして明治 16 年 10 月 16 日、品川彌二郎（校祖）が先導者となり「獨逸学士養成」の為の私立学校設立の申請を東京府に提出。

19 日に獨逸学協会学校（Die Schule des Vereins für deutsche Wissenschaften）の東京府認可を受け、22 日に創立、25 日には授業が開始された。こうして獨協学園の前身・初等科と高等科より成る「獨逸学協会



大正 15 年、かつての同僚や生徒たちに囲まれたミヒャエリス夫妻

庇護を受けていた「獨逸学協会学校」は、司法省から法学士養成助成金として毎年 2 万円を下附されており、大きく発展した。

明治 20 年 4 月、西周初代校長の老衰辞任の後、内

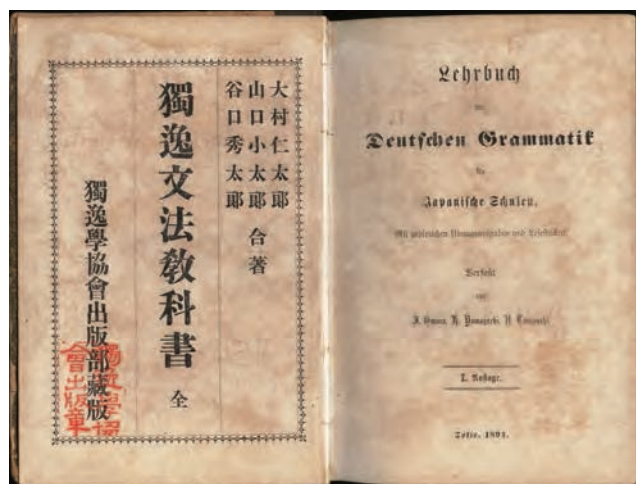
閣総理大臣を3度務めた桂太郎が第二代校長となる。桂の在職日数(2886日)は歴代1位であり、連続在職記録1位の佐藤栄作よりも長い。明治23年桂太郎(帽章Dの生みの親)が校長を辞任し、日本で最初の獨逸語学習者で帝大総長の加藤弘之が第三代校長を兼務した。また、レーンホルムの後に山脇玄が教頭となる。この年、大村仁太郎・山口小太郎の二人が教員となり、すでに教員であった谷口秀太郎と共にドイツ語界の「三太郎」が獨協に揃ったことになる。

明治26年、獨逸学協会学校の普通科を「獨逸学協会学校中学」と改称し、明治28年7月旧制帝大・旧制高校が日本近代化の完了教育機関として完備されて役割が終わったとされたため専修科が廃止され、この時を機に大学設立への門は事実上閉ざされた事となる。しかし、この後も「獨逸学協会学校中学」は旧制一高への登竜門として存在し、明治



末・大正期に活躍する秀英を幾人も輩出して来た。

明治27年9月、「三太郎」大村・谷口・山口は『獨逸文法教科書』を発刊。本書はドイツ語ばかりでなく欧米語学テキストの標準書となった。また、明治31年10月、『獨逸語學雜誌』を発行。ドイツ語の学習を通じて、欧米の最先端の人文科学・自然科学・医学を日本に相応しい内容と形において吸収する目的の雑誌で、語学学習をはみ出した論説・評論も掲載され、近代日本の知識人青年に与えた影響は大きかった。



獨逸文法教科書

明治34年4月大村仁太郎は、宮内省よりドイツ学校制度・王子教育の調査研究を命ぜられ渡獨する。同年12月6日22時5分不審火にて獨協の校舎・書庫等が全焼。滞獨中にこの悲報を受けた大村は、ドイツ皇帝ウィルヘルム二世に謁見した節、図書・物理化学の実験材料など多数の贈与を受け、またドイツ国内の有志から教材・図書の寄贈を受けた。ドイツにおける大村の救済活動は、翌年11月29日小石川区関口台

町16番地(現在地)の新校舎竣工・落成に多大な貢献を成した。大村のドイツでの信頼がいかに厚かったかは、これら援助と共にドクター・フェン氏より贈られた獨協を通じて日獨永遠の友情を祈念した大理石碑でも理解できよう。

明治36年9月、加藤弘之の校長辞任を受けて大村仁太郎(学祖)が第四代校長となり、知育・体育・徳育の「三育」を徹底した。教育家の大村は、日本におけるドイツ語の水準を高めたばかりでなく、合理的精神に基づき明治教育界を変革しようとした。また、野球・ボート等スポーツの他、グランドピアノを備えヴァイオリンをドイツから取り寄せるなど、音楽家大村恕三郎・東儀鉄笛らを擁して芸術にも力を注ぎ、現・校章と校旗そして校歌をも作った。後の第13代校長・天野貞祐(中興の祖)は、大村仁太郎に可愛がられ、卒業式においてドイツ語で答辞を述べることを指示された。この独文答辞は横浜で発行されていた日本唯一のドイツ語紙に載っている(明治36年11月刊)。

明治40年6月5日に大村仁太郎が急死。同月18日帝大理学博士・石川千代松が7月までの間急遽第五代校長に就任し、その後を受けて帝大教授で理学・薬学博士、日本薬学会を創設した長井長義(夫人はドイツ人テレゼ)が第六代校長に就任した。教頭には谷口秀太郎が就任している。



校旗

大正時代に入り、欧州大戦開戦と共に日本は大英帝国にならいドイツを敵として参戦した。青島攻略や南洋諸島接收の戦果は、日本国を一流国へ押し上げるといふ感銘を国民に与えた。このことが引き金となって、日本人のドイツ離れと共にドイツ語志望者は次第に減少することとなる。この事がその後の学校経営危機の引き金となり、恰も衰退を象徴するが如く、獨逸学協会・獨逸学協会学校創設時に尽力した桂太郎(大正2年没)、青木周蔵(大正3年没)、加藤弘之(大正5年没)らが、そして平田東助・山脇玄(大正14年没)も次々と他界して行く。また、「三太郎」の一人・山口小太郎が脳溢血で急死する。

大正9年7月に13年間校長を務めた長井長義が辞任し、新たに医学博士金杉英五郎(慈恵会医科大学長)が第七代校長となった。



大村の親友・フェン博士から贈られた日獨友好祈念大理石碑文(獨協学園資料センター保管)



昭和4年Dr. 長井長義が死去し、金杉校長に代わりドイツ語の雄である教頭の司馬享太郎が第八代校長に就任し、昭和8年獨逸学協会学校中学は創立50周年を迎え、『獨協五十年史』が刊行される。翌年、再びドイツブームが到来する。

昭和11年第八代校長司馬享太郎が東京帝大病院で死去。司法大臣小山松吉が第九代校長に就任。この年、日独防共協定が締結され、ナチス・ドイツとの関わりが深まる。

昭和12年のドイツ巡洋戦艦エムデン号来日の時、7百の獨協生が靖国大社へハーケンクロイツ旗を振り出迎えている。8月3日獨逸学協会学校中学は獨逸学協会中学校となる。12月には「三太郎」最後の一人・谷口秀太郎が死去。昭和13年「日独文化協定」が結ばれてヒットラー・ユーゲントが来日、その代表6名を本校に招いた。後先を考えぬ不幸な時代の束の間の出来事であった。



昭和13年、ヒットラー・ユーゲント、獨協訪問

昭和14年7月5日獨協同窓会が上野精養軒にて「三太郎先生追悼式」を開催。昭和15年欧州におけるナチスドイツや日中戦争など時局柄かドイツ語の志望者が極めて多くなり、200名の募集に対して1,360名の応募者があった程である。10月には生徒定員1,000名(1学年250名)に変更認可を得る。昭和10年代前半は獨協第二の高揚期となった。しかし、第二次大戦終了後の獨協は衰退の時期に入っていく。

昭和21年医学博士・吉岡正明が第十代校長に就任。昭和22年12月13日「財団法人獨逸学協会」は「財団法人獨協学園」に、校名も「獨協中学校」と改称した。「獨逸学協会」の獨協から「獨協協和」の獨協へ転身したのである。翌年3月には高校も設置された。その後、東邦大学創設者・額田豊が理事長兼任で第十一代校長へ、そして市川秀雄(第十二代校長)へと引き継がれる。その間、獨協の内情は混沌とした状態に置かれていた。第九代校長小山松吉以降の校長は、天野貞祐(中興の祖)まで獨協出身者が就任している。

昭和27年12月27日第一高等学校長から文部大臣になっていた天野貞祐(カント哲学研究の第一人者)が獨協の状況を憂いで、文部大臣を辞して第十三代校長に就任する。天野貞祐の登場により、財政の立て直し・教員の増強などが進み、戦後荒廃して来た獨協が

蘇り、目覚ましい発展を遂げることとなる。「三育」をベースに、天野イズムの一面として生徒に対する「徳育」が重視された朝礼が復活し、それは同席する教員へも感銘を与える説得力のあるものであった。「自由とは…」「日々新たなり」「可能性そのもの」等々、優しい語り口・身近な例え話など心を打つ問いかけ・訓話は毎週行なわれ、私事なれどその時の事が懐かしく思い出され、未だに忘れた事がない。

昭和35年3月、訪日中のアデナウアー西ドイツ首相は、「日本とドイツの青少年の友好のため」にと、獨協生9名と教員1名を6週間の日程で西ドイツへ招待し、その招待状が天野貞祐校長のもとに届いた。このことは多くの報道機関で取り上げられ、同年7月に訪独した一行の活躍は現地でも大きく報道された。



朝礼

昭和39年4月天野は、「大学は学問を通じての人間形成の場である」と提唱し、嘗ての専修科が継続されていたとしたら存在していたであろう獨協大学を設立して初代学長に就任、昭和48年獨協医科大学をも立ち上げた。昭和44年獨協大学初代学長の地位を退き、翌45年3月には18年間務めた獨協中高校長の座も退いた。昭和55年3月6日、この偉大な哲学者・教育者であり学園中興の祖の天野貞祐は、獨協学園のその後の発展を見守るかのように、老衰により96歳で他界する。死の直前まで明晰であったという。

天野貞祐退任後、昭和45年小池辰雄(第14代)、昭和54年篠原寛(第15代)、昭和57年蝦名賢造(第16代)、昭和61年山鹿誠次(第17代)、平成1年朝倉保平(第18代)、平成5年戸張敦雄(第19代)、平成7年奥田千秋(第20代)、そして平成12年永井伸一(第21代)へと校長は引き継がれて行く。この間、中高一貫教育が始まり、獨協の特徴であった中学校からのドイツ語教育が消えるなど教育現場は変容した。ドイツ語授業は選択となり授業時間は減少し、ドイツ語を学習した者だけでなく多くの卒業生はこの状況を憂いでいるのでは…。ここに獨協の特異性は無くなったと云える。

第21代校長に永井伸一が就任して以来、天野イズ

ビオトープ 武蔵野の草・水草が繁茂。自生のホタルが舞う。



ムを継承して「当たり前前」のことを「当たり前前に行なう」という行動指針と「人類と他の生物との共存」をテーマとした環境教育が教育理念として取り入れられた。それにより、「ビオトープ（太陽電池の利用による）」・「屋上緑化（世界に類のない獨協独自の栽培技術による）」・「コンクリート塀に替わる緑化塀（日本古来の樹木による）」など、目白・獨協中高は今や日本を代表する環境教育先端校として認知され、進学校としての評価も上がり、獨協は甦って来たのである。

また、平成21年『PASCCH』パートナー校として認定される名誉を受け、9月5日にその調印式が行われた。これは、ドイツ政府がF・W・シュタインマイヤー外務大臣の主導の下、2008年（平成20年）より「学校：未来を開くパートナー（PASCCH）」事業として連邦外務省がコーディネーターとなって展開しているものであり、世界中で1500校が計画されている。そして、日本では4校がその枠の中にあり、我が校・獨協中高がその一校として選出・認定されたものである。しかし、ドイツ語教育が減少しているにも拘らず認定されたということは、歴史的にドイツと

非常に関わりが深いかった唯一の学校という事への温情なのであろうか。

そして、平成23年永井伸一校長退任後、第22代校長に教頭であった渡辺和雄が就任し、天野イズムと共にこの環境教育を通じた社会貢献の教育理念は確実に継承され、進学校としても定着して来ている。

昭和39年獨協大学、昭和48年獨協医科大学、昭和49年獨協医科大学病院、同年獨医大附属看護専門学校、昭和55年獨協埼玉高等学校（男女共学）、昭和59年獨協医科大学越谷病院、昭和62年姫路獨協大学、平成18年獨協医科大学・日光医療センターが設立された。獨協が戦後このように目覚ましい発展を遂げることができたのは、天野貞祐（中興の祖）が居たからこそ成し得たことであると云えよう。

品川彌二郎（校祖）・大村仁太郎（学祖）・天野貞祐（中興の祖）ら三大人の各々の「誠と志」。そして「独逸学」創唱者達：西周・青木周蔵・桂太郎・加藤弘之・山脇玄・平田東助・山口小太郎・谷口秀太郎らの一人一人の「確信と感性」、そして「努力」。

1876年（明治9年）の獨逸同学会、1881年（明治14年）獨逸学協会を経て、1883年（明治16年）獨逸学協会学校に始まり、財団法人「獨協学園」、学校法人「獨協中学高等学校」は、2013年（平成25年）10月22日に130周年を迎え、更に輝かしい未来へと発展し続けて行く。



桂太郎考案・帽章（左）と現在の校章（右）

独逸学協会中学校 幕切れの五年生

昭和20・5年卒 畦 森 公 望

私達のクラス会は「独協芽城会」と称する。

独逸語科で構成されている。

昭和15年入学。昭和20年（1945年）5年卒業である。

この年、4年生も同時に繰り上げ卒業となった。故に昭和20年に限り5年・4年と記される。

敗戦の昭和20年は旧制中学校終焉の年でもあった。

大まかではあるが、昭和18、19、20年卒業の4学年の少年達は、その成長過程において非常に波乱に富んだ少年期を送ったと思う。今に生きる人達は、歴史を語る時、戦前戦後と比較分類する思考をするが、そのハザマで必死に這いずり廻った世代の戯言とご容赦頂きたい。

私達は昭和の大不況のさ中に生まれた。子供心に残っている光景だが、貧に喘ぐ寒村の少女達が、花柳界や紅灯の苦界に売られて下働きをさせられ、夜は特別な小学校の夜学に通わされていた姿を思い出す。昔の封建時代から続く貧困の象徴だった。一方、銀座などの盛り場では未だ大正ロマンの残り香さえ漂う頃であった。が、世界の風雲は徐々に急を告げはじめ、早くも昭和6年には満州事変、7年に5・15事件、8年に日本が国際連盟脱退、11年2・26事件、12年に日

中戦争と大戦への口火が燐り始めた。

そして獨協入学の翌年、米英に宣戦布告。次第に泥濘の戦に突っ込んでいったのである。

世はすべて戦時色になり、中学も軍事教練を中心とした日々になってゆく。出征兵士を送るのを見ない日は無かった。中学2年生ぐらいから勤労奉仕に駆り出される。凍てついた赤羽堤防の土掘り、飛行場整備のため朝から重いモッコ担ぎ、5年生で本格的な日夜勤の勤労働員となる。

戦争と共に育ち、暮らした、まさに戦中派といわれる所以であろう。

連日、気を抜く間とて無かったが、私達の獨協は楽しかった。そして、あの頃の“獨協”という名は非常に輝いていたのである。進学校としても、私立では開成中学と並び称され、東京の中学ではトップに立っていたのである。殆どの仲間達が、獨協にするか開成にするか迷ったものであった。当然、医師を目指す者や、医師の子弟は獨協を選んだのだが。

当時の制服は濃紺で、袖にグリーンの線があり、ポケットはすべて無し、勿論オーバーは禁止。肩鞆は登校時は右肩から、下校時は左肩から、と合理的であった。いつの頃からか、それに黒のゲートルが加わった



小山松吉・第9代校長

小山松吉校長、田村二十一教頭をはじめ、非常に個性豊かな方達であり、一部の人を除いては学究的で軍時色を匂わせない先生方であったと思われる。

私達にとって、「独協」といえば「芽城会」、「芽城会」といえば「独協」と自動的に連鎖するのである。

戦後、散り散りになっていた仲間達の情報も時と共に徐々に分かりはじめ、まず数人が核となり、年を追う毎に充実していった。以来60数年宿泊旅行も交え、毎年欠かさず30人以上が集まり、夫々の独協を回想したり、情報を交換し合ったりしてきた。

私達は独協を懐かしむと同時に誇りにしている。ただ、昔に卒業した私達には、それを語り合う脳裏にはいつもあの風格ある木造校舎があるのである。門の正面に顔を向けた古めかしいが威厳のある玄関と全景がセピア色で浮かんでくる。そして、次から次へと景色が移ってゆく。左手には孤立して剣道場、図書館、美術室と同時に今泉師範、ダイナマイト先生の面影も重なる。母屋の方に眼を転ずれば、二階の講堂は勿論、職員室、古い教室、柔道場、さらに掃き出しのついた六畳間を持つ囲炉裏付きの小使室、別棟の兵器庫、売店と。そして教会と道一つを隔てて音羽の崖っ縁に立つ新校舎・・・と此処までは迷わずに徘徊出来るだろう。

足元に眼をやると、あの重い三八式歩兵銃を抱え、帯剣を腹に巻いて這いずり回ったグラウンドの砂や、小砂利の感触や匂いまでが懐かしく甦ってくる。三八式といえば我々にはお馴染みの銃である。後には九九式というもう少し軽い銃に進化したが。あの兵器庫には村田銃もあり、軽機関銃、銃剣、サーベル、背囊、手榴弾、飯盒が整然と並び、テレピン油の匂いが充満していた。思い出は更に不規則に浮かんでくる。柔剣道(全員)の寒稽古はキツかった。未だ満天星空の頃に家を出て、漸く味爽から明けた頃稽古が始まる。母親達もたいへんだったろう。更に低学年の頃から背負袋に三八式を担ぎ夜中の40K行軍、完全武装して日光までの行軍・・・落伍する生徒は一人位いたかどうか？。今の中・高生と、その親達には想像を絶する日々の連続であった。

が、ふと昔を振り返って不思議な気がする。それはあの戦時下で、配属将校等が睥睨し憲兵や特高の

眼が何処にあるか分からない時代にあったにもかかわらず、当時の独協の空気がなんとなくリベラルだったなと思うのである。他の中学へ行った友人達の話と比較してそう思うのである。他所はもっとビリビリした毎日であったらしい。今にして思えば、あれが独協の校風だったのかも知れない。先人達の、知性と努力によって培われたヨーロッパ文化の吸収と消化による歴史の厚みであったのだろう。加えて、私達の仲間は可成りシタタカで、さりげなく個性を主張しながら学校生活を送っていたように思う。だからこそ嫌な配属将校や獰猛な殺人鬼の体操教師等に日常的に打擲されながらも、私達は決してめげなかった。当時の権力を嵩に着た連中は、中学生の人権などは肥溜めに浮かぶ蛆の如きものだろう。

更に当時の仲間達を振り返ってみると、実に多士済々であった。

ちょっと思い出してみよう。

彼らは、文学・小説に耽溺。

- 〃、柔剣道場に入り浸る。
- 〃、軍艦、飛行機の解析に余念が無い。
- 〃、ひたすらクラシック音楽の空間に我を忘れる。
- 〃、野球で日暮れまで走り廻る。
- 〃、映画館にセッセと通う。
- 〃、江戸文化の寄席で名人芸に酔う。
- 〃、少々与太って自己顕示に走る。
- 〃、ひたすら勉強の机に向かう。

等々と、事々左様に豊かな個性を持つ仲間達が入り乱れて付き合いながら成長していったのである。退屈の時がある筈はなかったのである。

先に述べたように、卒業するまでに授業以外に様々なことをさせられたが、私達が自慢できるのは自ら勉強を怠らなかったことだろう。

独協時代に受験の為の授業を受けた覚えは全く無い。先生方の授業を糧に独学に近い努力をしていたと思う。それは仲間達の実績が証明していると思う。旧制高校、陸士、海兵(英語科)、国公立高専、医専、医大予科、私立医専、薬専等に相当数の者が進んでい



S 17年・日光までの行軍

る。

勿論、戦後に進学した者も大勢居る。而も4修で合格した連中も10人を下らない。長じて医大教授、薬大教授、著名大学教授、大学理事長等も輩出している。当然、医師、歯科医師、会社役員も多数居たが、小数を除いて殆どがリタイヤするか、他界してしまった。

彼等は伝統ある獨協生として当然といえばそうなのだが、私達の実績はそれのみならず、あの時代なればこそ私達だけが非常に誇りに思うことがある。それは、約20人を越す紅顔の美少年達が、純粋な激情に駆られ学業半ばにして進路を変更したことである。行く手に必ず「死」の淵が待っているであろうことを承知で陸海軍の軍籍に身を投じたことである。戦死者も居る。後世の人達には理解し難い行動であったろう。

時が経てば、様々な分析や批判もされようが、あの時代を生きた少年達の行動を否定したり、批判することは決して許されないことである。私達はそんな仲間達の勇氣と透明さを誇りに思っている。品川駅、東京駅頭での軍用列車の見送り、自宅での壮行会と仲間達が胸を熱くしながら訣別の手を振ったのであった。この光景を思い出す時、今でも胸が痛む。そして彼等を送り出した親の心を想う。

未だ少年である吾が子との別れを望む親が何処にあらうか。

明治の親達は凄かった、とつくづく思う。

そして敗戦。諸大国に比肩出来た陸海軍の臨終に、17～18才で立ち会った世代は稀有であろう。それから荒廃した故郷への復員が始まる。吾が子を再び手許に迎えた母親達は、そっと欣びの涙を押さえたことであろう。そして復員した仲間達は夫々努力して進学したのである。唯一人、陳君のみは例外で永く消息が掴めなかったのである。彼のことは過去に獨協通信にも載ったのでご承知の方も居られると思う。彼も愛国心に燃え陸軍の特幹飛行兵として入隊、満州へ送られ敗戦。ソ連に抑留、厳寒の中、労働と飢餓に堪え、三年後に帰還するも「行く時は日本人、帰ると国籍が変わった…」と慨歎する。

日本人として、同級生の仲間として忸怩たる思いが、喉の奥に引っかかった小骨のように、いつまでもチクチクと残っていたのである。

以来台湾暮らしで、たまに芽城会に出席、欠席の時もその日に台湾の菓子等を送ってくれる程、仲間を懐かしく、大切に思ってくれていた。私達も機会があれば訪台して旧交を温めていたが、昨年不帰の客となってしまった。

戦中・戦後の苦難は多々あるが、級友の中にも空襲で家と家人を失った者は多数ある。ある友人は工場の夜勤明けから帰ってみると（帰るといっても板橋から亀戸まで歩いて）家も家族も全く消えてしまっていた。失意のまま、牛込のわが家まで歩いて到着し、一休みの後再び二人で惨状の跡を尋ねるも不明であった。そうした多くの不運な仲間達は、残された家族の糊口を守るために、折角4修で入った旧制高校や上級校、あるいはその後合格が決まった大学や専門学校を中退、中学で培った夢を全く放棄し懸命に生きてきたのである。どう仕様もない運命を遣る瀬ない思いで友と語り合ったことを思い出す。

後年、様々な苦難を乗り越え、殆どの仲間達が「その道」で名を馳せ世に貢献してきたのである。私達はそんな仲間達の芽城会を生涯の誇りに思う。学年の独乙語科を二分された勤労働員の実状を知る人も少なくなかったが、それを語る機会は今も来ないだろう。殆どの者が昔のことを外へは語りたがらない。私もあの時代の「語り部」になろうとも思わない。周りの人達の多くが異邦人になってしまったからである。”昔は良かった”と年寄りの決まり文句を云いつのる心算はないが、教科だけを見ても昔は生徒が将来文科系に進もうが、理科系に進もうが学校は満遍なく教育したのである。十八史略まで学んだものだ。

子供の時代に教えられたことは一生忘れない。もっと子供達には遠慮せずにどんどん詰め込むべきだろう。鉄は熱いうちに打てという。許容能力のある時代に、ゲームや受験勉強のノウハウに精出すのは愚の骨頂である。いつの頃からか日本人は「楽」を求めるようになってしまった。

芽城会は今でも約20人が集まる。ある者は酸素を補給しながらでも懐かしい顔を見に寄り合う。卒後60年の記念クラス会の時も、家族の介添えもあり盛大に行われた。こんな芽城会を世間の人は大いに羨む。5年前に傘寿の記念に3回目の記念誌を発行した。同窓会にも進呈したが頁はめくられたのだろうか。

その後、稿を寄せた仲間が一人去り、二人去りして彼等を偲ぶよすがの遺稿集になりつつある。私達の獨協がだんだん小さくなってゆく。大切な成長期を共に生き、共に苦勞し、哀別離苦を重ねながらも交情を絶やさぬ努力があればこそ、今も芽城会が続いているのだろう。

こうして仲間達と共に八十路の半ばを彼岸の水際に添ってゆっくり歩いている。生と死の間で成長した少年達もやがて老い、果ては路傍の石となり後世の道作りに多少は役立つこともあろうが、なんとしても軍靴に踏みにじられることだけはご免だ。

次の芽城会にも足を引き引き集まるだろう。衰えをかこちながら、また盃を交わそう。いみじくも友は謂う。芽城会の一人一人が

”Mein guter Kamerad” と。

(筆者略歴： 昭3生。海軍に少々。東歯大旧制学部一期生。開業医。合気道師範。同窓会常任幹事)



昭和20・5年卒・芽城会記念誌

台湾在住の同窓生からの手紙

昭和 46 年卒 竹 内 文 生

平成 25 年 1 月 21 日に中華民国（台湾）に在住の同窓生からお手紙と在学当時の思い出の写真を頂戴しました。同窓生の名は傳文龍さんで昭和 10 年のご卒業です。現在 97 歳とのことです。

台湾出身の同窓生については、「独協通信」62 号、63 号にて新宮先生並びに昭和 35 年卒雪山さんが台湾に行かれ多くの同窓生に面会され詳しく当時の様子やその背景について紹介されていますが、傳さんはその時紹介された同窓生ではありませんが、「独協通信」が届いていたこともあり、今回のお手紙となったものと考えます。

台湾は、日清戦争後の 1895 年（明治 28 年）に当時の清国と締結された下関（馬韓）条約で清国より日本に割譲されて以来第二次世界大戦が終結する 1945 年（昭和 20 年）までの 50 年間にわたり日本が統治していました。因みに獨逸学協会学校第二代校長桂太郎は校長を明治 27 年 7 月に辞職した後、明治 29 年 6 月より 4 ヶ月台湾総督府第二代総督であった。

そうしたこともあり、大正時代末から昭和の初めに

かけて多くの台湾在住の人々の子弟が獨協で学んでいたようです。

傳さんもそうした同窓生の一人で、昭和 10 年まで獨協で学んでいたようです。そして、お手紙にもありますように、中学 2 年生のとき横浜港に入稿したドイツの戦艦 EMDEN 号を見学したときのことを紹介されています。EMDEN 号については昭和 49 年卒の沖山さんがいろいろと調べてくださり、当時の艦長のことなどいろいろとわかりました。

また、傳さんは在学中に絵画部に在籍され、顧問の先生でおられた山崎先生から油彩を頂いたことなども紹介していただきました。

その他のことについては何も触れられていないので詳細は不明な点が多々ありますが、昭和初期の学園生活の一端を知る貴重な資料をお送りいただいたことを、誌上ではありますが深く感謝している次第です。最後になりましたが、傳さんがこれからもご壮健でおられるようお祈り申し上げます。



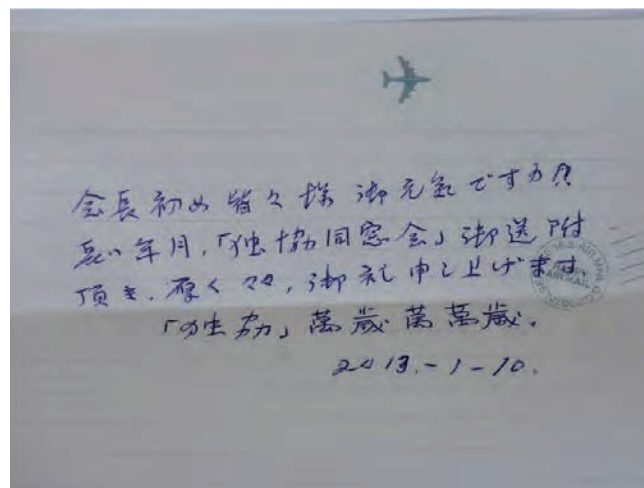
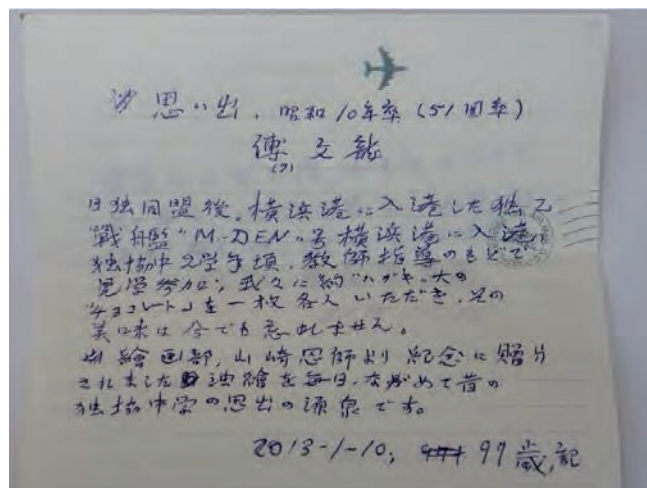
昭和 10 年 3 月 2 日 卒業式直後の校舎



昭和 9 年 10 月 絵画部（中央段左より 5 人目が山崎先生、4 人目が傳氏）



1934 年（昭和 9 年） 秋季、山崎善次郎先生より傳氏へ贈られた油彩



平成 24 年 1 月 14 日、写真と共に送りいただいた書簡



Karl Dönitz 1934 年に EMDEN 艦長に就任。後に潜水艦隊司令長官 (U-Boot 作戦)。敗戦処理時の首相



1934 年～1935 年、日本を訪問した頃の“EMDEN”

6月15日(土) 総会・懇親会開催

今年度の総会は、下記のご案内のように平成 25 年 6 月 15 日(土)に開催されます。
 総会付議事項につきましては、別紙レジメ(通常総会議案書)にてご確認ください。
 また、総会後は、例年通り「椿山荘」にて懇親会が開催します。
 恩師、旧友も多数参加されますので、奮ってご参加下さいますよう宜しくお願い申し上げます。

総会・懇親会のご案内

開催日時：平成 24 年 6 月 15 日(土)

場所・時間：総会 会場：獨協中学・高等学校 小講堂
 受付開始：午後 4 時 30 分
 開始時刻：午後 5 時
 懇親会 会場：椿山荘・ギャラクシー
 受付開始：午後 6 時より
 開始時刻：午後 6 時 30 分

懇親会費：(会場受付でお支払い下さい。)
 昭和 26 年以前の卒業生 …………… 無料
 昭和 27 年～平成 19 年の卒業生 … 5,000 円
 平成 20 年～平成 24 年の卒業生 … 2,000 円
 平成 25 年の卒業生 …………… 無料

◇総会・懇親会の出欠につきましては、同封のご回答用紙に必要事項をご記入の上、返信用封筒に封入して、6月5日(水)までに必着するようにご返送ください。

物故者名簿 (『独協通信』78号以降) ご冥福をお祈り申し上げます

卒業年	氏名	物故年月日	昭和 19	駒宮 正治	H23.10.14	昭和 24	山崎 晴康	H16.2.22
			昭和 19	牧原 悟郎	H24.4.5	昭和 25	市村 圭司郎	H24.2.18
大正 3	牧 祥三	H25.2.8	昭和 19	河野 安夫	H24.2.9	昭和 26	楠 正	詳細不明
昭和 4	鈴木 浩	H24.8.9	昭和 19	飯塚 久義	H23.5	昭和 26	永瀬 元司	H22
昭和 7	中島 稱吉	H24.3.7	昭和 19	児島 成男	H24.11	昭和 31	佐久間 和男	H23.12.26
昭和 10	石田 格	H25.1	昭和 20	河合 義雄	H23.7.2	昭和 32	日野 茂	H24.3.24
昭和 11	吉田 英男	詳細不明	昭和 20	西澤 富次郎	H24.5.15	昭和 34	高橋 勝鑑	H22.11
昭和 11	河西 定二	H17.8	昭和 20	加藤 温夫	H23.10.13	昭和 34	伊沢 清	H24.7.5
昭和 14	高田 渙	H23.11.10	昭和 20	山中 一夫	H23.11.16	昭和 34	野原 宏	詳細不明
昭和 14	馬淵 静雄	H24.4	昭和 20	鈴木 進	H24.6.27	昭和 40	山田 祐之	H22.7.4
昭和 16	鈴木 隆次	H22.11	昭和 20	星 恒雄	H23.7.30	昭和 41	永沢 俊幸	H23.5.30
昭和 16	上野 正重	H23.7.1	昭和 20	羽鳥 裕久	H24.7	昭和 42	林 秀樹	H23.8.22
昭和 17	長手 武彦	H24.4.28	昭和 20	平田 栄一	H25.2.5	昭和 42	今村 博	H23.12.24
昭和 17	小島 毅	H23.8.16	昭和 20	納富 博太	H25.2.8	昭和 43	柏戸 泉	H22.9.30
昭和 18	高橋 実	H23.4.10	昭和 20	濱田 望	H25.2.12	昭和 45	杉浦 章太郎	H15.9.21
昭和 18	伊藤 光秋	H23.10.21	昭和 20	塚田 邦彦	H24.11	昭和 46	有井 辰夫	H24.1
昭和 18	山下 英一	H23.8.4	昭和 21	服部 忠男	H23.10.17	昭和 46	安達 信孝	H24.8.18
昭和 18	森田 東吾	H24.10.10	昭和 22	荒木 繁蔵	H23.9.26	昭和 47	難波 潤	H24.11.10
昭和 18	青木 勲	H21.1.29	昭和 22	山崎 英憲	H24.1.7	昭和 52	伊藤 文男	詳細不明
昭和 18	荒 明夫	H11.8	昭和 24	永野 志朗	H22.7	昭和 53	新井田 茂樹	H24.2

目 白 だ よ り

2012 年度の活動を振り返って

ワンダーフォーゲル部 部長 黒川 樹 (高1)

僕は中Ⅲの春に部長を任され、いろいろなことに戸惑いながらも、一年間部活を続けることができました。この場をお借りして一年間の活動を振り返り、現在の部の様子を紹介したいと思います。

ワンゲルの活動は、4月の新歓ハイキングから始まります。3名の新入部員を迎え、部員とOB、顧問の先生方と楽しくハイキングとバーベキューをしました。部員数は21名とかつてない人数です。

翌月から夏合宿の訓練を兼ねた本格的な登山が始まります。5月の丹沢鍋割山、6月の奥多摩本仁田山、7月の奥多摩六ツ石山と、いずれも登降差のある健脚

コースです。鍋割山で上級生は、山小屋が使う水をボランティアで山頂まで担ぎます。新部員にとっては初めての経験でつらかったと思います。先輩は重い荷物を担いでいるのにペースが速く、いくら歩いても山頂に着かない。しかしやっと山頂に着いた時の感動と解放感を彼らも感じたはずです。山が好きになる瞬間です。

こうして少しずつ山に慣れ一学期が過ぎたころに、部の大きな目標である夏合宿があります。今回は南アルプスの仙丈岳、間ノ岳、北岳を3泊4日で縦走する計画です。部員になって初めての3000m級縦走ということもあり、合宿前から少しずつ練習を積んで、万全の体制で臨みました。

登山口の北沢峠から仙丈岳に往復、さらに中Ⅲと顧問のパーティーで間ノ岳、北岳を縦走するという、僕たちにとってハードな合宿でした。しかし今まで味わったことのない3000mの空気と景色は全てが新鮮で、思い出深いものでした。

夏が過ぎ葉が少しずつ赤く染まる頃に、秋合宿があります。今回は日本百名山である埼玉県の両神山に登り、登山道の所有管理者の山中豊彦氏にガイドをして戴きました。山中氏は県警山岳救助隊協力員で遭難救助のプロです。山の自然や遭難救助などの他では聞けない話をしていただき、学びながら楽しく登ることができました。

秋合宿が終わると活動は落ち着き、放課後のトレーニングをしながら月一回の山行を行います。日没が早いため無理なく登れる山が多く、今年度は三頭山、権現山、影信山、御





坂山に登りました。紅葉から初冬～残雪の山々の自然は、夏とはまた違った姿で僕たちを魅了してくれます。

一年を振り返ると、2回の合宿ともに雨に降られるなど、天候に恵まれないことが多かったのですが、それでも楽しく登れたのはメンバーのおかげです。しっかりと指導していただいた顧問の先生、OBの先輩の助力、そして僕の指示に文句を言わず従ってくれた同輩後輩たちのおかげだと思います。来年度は今年度以上に楽しく、さらにレベルアップした活動を行ってきたいと思います。

ホームページでたどるワンダーフォーゲル部 OB 会

クラブOBだより

昭和35年卒 常盤雪夫

獨協中学・高等学校同窓会のホームページの表紙下部の「学園関係リンク他」をクリックすると、赤色のロゴマーク (Alpine Club of Dokkyo O.B. 略称 ACDO) がある。これをクリックすると我々のホームページを開くことができる。

本稿の内容については、ACDO のホームページ (以後 HP と略記) に記載されていることといくつかの重複があることを予めおことわりするとともに必要な引用があることをご承知いただきたいと思います。

●ワンゲル部創立とOB会の設立

そもそも、ワンダーフォーゲル活動とは何か、あるいは創部のいきさつについては、HP の山行記録「創部から実践まで」として、森本・打矢氏の文章が掲載されている。また、その後の部活動などの様子は、山行記録中に渡辺氏の「部活動報告」がある。文中後半の北アルプス・夏合宿に向けての中で「…高二、一年が主体となり厳しく慎重に行われた。…」とある高一年とは、まさに私達の年代の部員のことである。

現役生だった私達には知るよしもないが、この時期には、卒業した先輩の間では自然発生的にOB会としての組織の基礎が作られたと聞いている。そして実際に、1958年の初夏にはOB・現役の合同山行が奥多摩・入川谷で行われた (HP のアルバム・1958年の山行)。

これ以後、夏や冬の合宿にはOB有志の参加を得て、合同で登山することが恒例となった。この伝統は、その後約20年もの長きに渡って続くことになる。また、OB会独自の山行も行われたり、機関誌「ACDO」の発行もされ、さらにはキルティング製のパーカーも自主製作された。このパーカーの胸にはACDOのロゴが縫い込んであり、誇らしく着込んで町中を歩いたことが懐かしく思い出される。また、卒業した部員等の進学した獨協大学山岳部によるヒマラヤ遠征にお

いては、ささやかながら協力活動もあった。

1960年以来ワンゲル部の顧問として部活動を指導された故高梨先生のご挨拶 (HP・備忘録) に始まる、OB会発足のための設立総会が開かれた。1985年10月のことである。

この席で選出された若井、井上、滝、仮屋園、中川、中尾氏らの準備委員や長瀬氏等によって会則、名簿、名称: 獨協学園ワンダーフォーゲル部OB会が提示され、翌1986年6月の第1回総会開催時に議決され正式に現OB会が発足した。

●OB会の活動

会則で年1回の開催と定められた総会は、本年度28回目となる。総会では、会長・幹事の人事の他会計報告、山行計画等が話し合われる。とくに当該年度に還暦を迎える会員の赤シャツ披露は圧巻である。また、退職された顧問の先生の感謝会が同時に開かれることもある。会員の奥様、学友の参加もあり、華やか中でも談論風発するのが常である (HP の山行・イベント情報)。

総会と同じく年1回の秋の親睦会も長年続いてい



設立総会 (東京會館・天成閣 1985.10.20)

る。初めのころは、埼玉県飯能河原でおこなわれていたが、ハイキングとともにゆっくりとバーベキュー料理を味わう目的から、小諸・日新寮に場所を変え一泊二日で行われる。前庭での”子豚の丸焼き”は諸般の事情から”焼肉”になったが、会員、ご家族、友人そして知人そして現役生等の多数が集い、満点の星空のもと夜更けまで語り合うことになる(HPの山行・イベント情報)。

冬期を除く月例山行も活発に続けている(HPの山行・イベント情報)。首都圏近辺の日帰り登山であったり、福島県あるいは長野県まで足を伸ばすこともある。主として佐藤(1960年卒)が企画するこれらの山行は、中・高年となった我々にとっても体力的に無理なく、何より登山者の少ない山々であるから大自然を我々だけで満喫できることである。このため、会員の奥様や友人の参加も多い。

話は前後するが、ホームページは、ワンゲル時代を含め多くの未整理の写真があったことから、記録として残して置きたかったこと、また故高梨先生の23年にわたるワンゲル部山行記録(HPの山行記録)を読ん

だ時、短いながらも緊迫感あふれるコメントとともにワンゲル部の歴史を残して置くべきと考え、奥様のご了承のもと記載したものである。1998年の開設以来、随時、会員の消息などOB会に関わる様々な情報(例外もある)を収めてきたつもりである。とくに最近の携帯端末の普及を考えると、山行時の情報(集合場所・時間、行程など)も現場から確認出来るようになって

いる。これまで多くの方々から様々な情報を頂いたが、サーバーの容量の関係から割愛せざるを得ないものもあった。お詫びする次第です。

ただ、ホームページの内容を更に充実するためにも、秘蔵写真などをご提供いただけると、管理人として幸甚これに尽きる思いです。

現在、OB会会員登録者数は約120名(ただし、2008年以降の卒業生については未整理)、会長は中野氏(1974年卒)です。総会案内は希望者には「OB会通信」として電子メールによる送信もしています。

獨協学園ワンダーフォーゲル部OB会ホームページ
http://www31.ocn.ne.jp/~dokkyo_wv/

戦時下 — 柔道部員の思い出 —

クラブOBだより

昭和23年卒 橋本徳朗

独協通信78号で柔道部OB高田氏の文章を拝見。創設期の活況や現在まで絶えることなく続いている部の様子を頼もしく知った。その中に戦時中の資料が不足しているとあったので、余り参考にならないと思うが一文したい。

昭和18年中学入学と同時に入部した。尚武の時節でクラスからは数名は入ったと思う。木造校舎に囲まれた道場は中央に柱があり、そう広くはなかった。授業の中にも柔道はあり、特別な場所という感じはなかった。部員は放課後任意に集まり、受け身の練習や主に同級生との乱取りをした。その頃の挿話を記す。

1) 学習院との試合

ある日初めての対外練習試合に同行した。我々は見学応援で、上級生が対戦した。学習院は当時華族学校で、白面の貴公子が相手だと思ったら巨漢もいて驚いた。勝敗は忘れたが、途中唇を切った相手選手がいて、時ならぬ朱唇を美しいと思った。

2) 柔道部員、前へ

たまたま正課の授業の折、指導される佐藤先生がお休みになった。代わりに池田配属将校が補講にみえた。氏は柔道がお好きと見えて、永田先生と共によく部活に来ておられたので補講を引き受けたのだろう。氏は突然「部員は前へ出よ」と言われた。残りの生徒をその部員数に割り振って対戦させようというのである。つまり部員は5人6人抜きを命じられたのだ。私は困惑し2人目位で交代(敗退)し、後はエース級の

友人が次々と大柄な生徒を投げて行くのを見ていた。思えば記憶に残る時間になったが、専門の先生の決してなさぬ勇ましいが無謀な指導だったかも知れない。その時初めて組み合った級友の身体の重さが、今も手に残っている気がする。

3) 締めで落ちた上級生

乱取り中に落ちて“活”で蘇生した上級生がいた。4年生だったろうか。朦朧と立ち上がってほどけた自分の帯を手にしてにやりと笑った。佐藤先生は「それは帯だな」と声をかけ見つめておられた。その時の先生の優しさ。そういえば、時たま見える田島先生も高段者という噂が信じられない位の痩身を稽古着に包んで、にこにこ微笑んで相手をして下さった。先生方の柔道も好き、生徒も可愛いとの思いは、我々にも伝わってきた。当時の4・5年生は、我々の戦闘帽にカーキ色の制服と違って、学生帽と学生服で格好が良かった。あの颯爽とした部の先輩がたには陸士海兵に進まれた方がおられたと記憶する。

以上、中1または中2の時の思い出を記した。その後、空襲や動員が始まり部活も授業も途絶えるようになった。敗戦後復学しても柔道の記憶がないのは、武道禁止のせいだったかも知れない。後年、友人は講道館で佐藤先生に出会っている。戦時中にも拘らず自由で和やかな雰囲気だった柔道部。それは、先生方の人格によるところ大と感謝している。なお、文中記憶違い等あれば許されよ。(平成25年2月、記)

私の近況 卒業 10年

●昭和 28 年卒同期会の永久幹事を受け、2 年に一度の開催を現在も続けております。天野貞祐校長第一期生となり 50 年。会員も半数近くの死亡となりました。年々思い出ばかりが強くなり、楽しかった学園生活のなか、親しかった諸先生方とテニス部の友人が夢のなかに現われる日が多くなりました。

＜佐藤 明德（昭 28 卒）＞

●双葉会（昭 28 卒）の中にある「鎌倉を歩く会」で、当初 11 名のメンバーが史跡や風景を楽しんでいた。喜寿を過ぎ何時の間にか 4 名になった。とうとう自分も楽しかった思い出を残し、参加出来なくなり残念です。

＜鈴木 孝男（昭 28 卒）＞

●終戦直後で世間も母校も混沌とした時代にあたふたと入学、吉田首相のバカヤロー発言があったりスターリンが亡くなったりした年に卒業しました。歳老いても未だ折に触れ学友と歓談出来るのは幸せですが、ひとり二人と欠けて逝くのは寂しい限りです。

＜藤田 吉若（昭 28 卒）＞

●卒後 60 年、在学中の思い出は天野貞祐先生が校長になった事。私は 7 年前に勤務医をやめ医師を廃業しましたが、5 年前に頼まれて介護老保健施設で半身不随や認知症の人達と共に余生を楽しんでいます。

＜渡辺 洋（昭 28 卒）＞

●「最近とても楽しいこと」今、卒後 50 年。10 年前に 40 年振りに再会したクラスメートと毎月食事会 & ゴルフを楽しみ（時々家族ぐるみで）思い出話や孫の話などに花を咲かせています。今になっても親しく付き合えるなんて…。これからも元気に未永く付き合っていきたいと思う今日この頃です。

＜石山 賢一（昭 38 卒）＞

●週 2 回ドラックストアで一日を過ごし、他日は焼津港での活魚、農家直接の季節野菜の買い出しと富士を見ながら釣竿を出して毎日を過ごしております。たまに関口台町の校舎前に何人かで集いたいものです。

＜五前 國明（昭 28 卒）＞

●毎年 S 38 年卒、10 人弱のクラス会がたのしみです。幹事さん（辻定利君）には大変感謝しています。慈大 S 44 年卒は、私を含めて 4 名いましたが、昨年で私一人になってしまい寂しい限りです。

＜蛭名 大介（昭 38 卒）＞

●歯科大学を定年退職して 3 年、医療系専門校に再就職し、未だ半現役で健康に暮らしております。少々母校とは疎遠ですが、大学の独協会とクラス会には必ず出席しております。なお、昨年歯科医師独協会が発足しました。

＜柿澤 卓（昭 38 卒）＞

●昭和 38 年に卒業して以来、早 50 年の年月が過ぎました。中学・高校時代の思い出が、昨日のように思い出されます。特に部活（柔道部と生物部）の事、ドイツ語授業（漆山先生、酒井アルマ・オットー先生、たまに天野校長先生）のことなど。今は趣味のカメラ収集とフマリ巡りをして楽しんでおります。

＜風見 一太（昭 38 卒）＞

●中学からの 6 年間、当時住んでいた目白からバス通学した目白通りや学校周辺が、50 年経た今でも懐かしく思い出されます。毎年の級友との再会を楽しみにしている昨今です。

＜小西 彰（昭 38 卒）＞

●長年、特許関係のドイツ語の翻訳をしています。若い時に行けなかったドイツ・スイス・オーストリアの写真を撮りながらの街歩きとハイキングに、行けるだけ行こうと思っております。

＜鈴木 昭之（昭 38 卒）＞

●天野先生が校長の時の昭和 38 年卒です。伯父も父も大正時代の卒業で、産婦人科と内科医でした。息子も本校の卒業で、私と同様に小児科医です。本学の大学進学生についてもっと頑張りたいと、常々思っています。

＜山崎 征雄（昭 38 卒）＞

●薬学部教授に転身して 9 年。どうゆう訳か薬学部長になって 4 年が過ぎようとしています。気がつくと卒後 40 年、還暦目前です。有楽町線で独協生を見かけると、つい注目してしまいます。若いことは可能性ですね。私も新しい場所で新しいことにチャレンジしたくなります。

＜秋元 雅之（昭 48 卒）＞

●学生時代は、甲子園を夢見てガンバッテました？卒業して 40 年、還暦近くなり、体に留意して仕事をしております。

＜大戸 進（昭 48 卒）＞

●東京多摩地区で、腎疾患を中心とする診療グループを運営し、医師として活動しています。実は、独協はすべり止めで受験し、在学中は正直コンプレックスもありましたが、卒業後進学名門校（身の回りに多い）には無い良さに気づき、息子にも入学させました。

＜小澤 尚（昭 48 卒）＞

●大学卒業後、数学科教師として母校の教壇に立って 35 年、時代が変わっても獨協生の気概は不変です。今日まで同期生はもとより同窓生の諸兄には、講演会などで在校生のためにご尽力を頂きましたことに大変感謝しています。後輩に対する同窓生の熱き思いに本校の伝統を強く感じています。私自身は、スキー部顧問として全国大会に出場し、活躍できる部員の育成を目標に頑張っています。

＜窪田 潤（昭 48 卒）＞

●最近、“Die Kritik der reinen Vernunft”を読んでいます。実に面白く、今、天野先生と話す機会があったらなあ、などと思っています。

＜庄子 泰然（昭 48 卒）＞

●趣味がサイクリングということもあり、自宅から目白の母校目指して愛車を走らせました。当時の校舎ではなく、少々ガッカリ？しましたが、いいものですね！母校って…。最近独協の制服を着た学生と乗り合わせました。ガンバレ後輩！！

＜田原 理一郎（昭 48 卒）＞

●獨協高校卒業して 40 年が過ぎたのは認識していませんでした。筑波大学付属病院で脳神経外科医をしています。健康相談ありましたら、どうぞ。

＜松村 明（昭 48 卒）＞

●島根県松江日赤で外科医やっております。激務で正直

私の近況 卒業 30 年

つらい時もありますが踏ん張っております。最近鉄研時代の血が戻り、鉄ヨタ復活、撮り鉄、乗り鉄、模型大人買いです。

＜小池 誠（昭 58 卒）＞

●卒業して 30 年が経ちました。親しい友人とは年賀状のやりとりが続いておりましたが、昨年よりフェイスブックにて獨協つながりで色々な同窓生と交友が持てるようになりました。

＜鈴木 一成（昭 58 卒）＞

●今年、息子が高校を卒業。30 年前の自分を思い出します。今は 30 年分の貫禄？苦勞？が身についています。同窓会で会えるのを楽しみにしています。

＜前川 佳彰（昭 58 卒）＞

●早いもので卒業して 30 年が経ちました。在校中は、自由にイキイキと過ごし、その楽しい日々が忘れられ

ません。そして今でも、旧交を温める仲間が沢山いて幸せだと思っています。獨協時代の思い出と友人は自分の宝です。

＜水口 泰宏（昭 58 卒）＞

●卒業からあつという間の 30 年でした。現在練馬で宮本外科を開業しながら、予備自衛官をして 10 年ほどになります。

＜宮本 成基（昭 58 卒）＞

●今でもよく HP を見て、母校の状況を確認しております。

＜石垣 征一郎（平 5 卒）＞

●都内で歯科開業。自分が日本一アホな歯医者だと思う今日この頃。でも何とかの一つ覚えで矯正専門医として存在。近ごろ思い出すのは、30 年前の歌謡曲や、内緒で乗った原付バイク、そして古い独協の校舎とグラウンドや体育館…。

＜貞永 嘉浩（平 5 卒）＞

クラス会だより

昭和 19 年卒（ドイツ語組） 獨協 53 会

恒例のクラス会、場所を変えると迷子になるからという意見もあって、今年も東中野の日本閣で 10 月 31 日に開催しました。

参加者は 13 名でしたが、うち 1 名は尾島君の付き添いで来られた、宝塚出身の小乙女幸さん（芸名）です。昨年同様、案内通知からスナップ写真の配送まで、高齢者の苦手な仕事をお願いしましたが、その素早いこと。私たちも昔はそうだったなどと、負け惜しみを云ってもしじまらなと感じました。

C D の伴奏入りの歌やお話相手など、福祉サービスの面でもお世話になったように思います。

宝塚音楽学校は兵隊屋敷みたいでしたと、兵隊を知らない世代から教えられ、それほど厳しくはなかったものの獨協時代の教練で、習志野や富士など本物の兵舎の泊まり込みでは蚤の襲撃に悩まされ、農家の縁先の露営では、満天の星空を仰ぎ、寒さをこらえて一夜を明かしたことなど、いろいろな懐旧談に花が咲き、来年も元気で集まろうと声を掛け合いながら散会しました。

（原 和夫・記）



昭和 27 年卒 花の二七会

30 年以前から毎年欠かさず開催されてきた『花の二七会』、今年も 9 月 27 日（土）神楽坂のトリノで昼 1 時より午餐会形式で行う。

昨年までの此の会には欠かさずご来席頂いた大久間先生と、同期の佐藤矩男、河野寿夫両君、故赤平君の妻君前トリノ社長涼子さんの 4 名に黙祷を捧げた後に、幹事・清水君の発声で乾杯。座も賑やかに出席者各人の 3 分間スピーチ、原発問題まで語り合われ、予定の時間も延長気味ながら、来年も元氣な再会を祈念し次回の幹事・宮本君の手メの音頭で散会した。

（平成 24 年度幹事 清水・田森・筒井：記 AT）



昭和 36 年卒（ドイツ語クラス） 獨協 36 会

獨協を卒業して半世紀を越え、仲間も 70 歳を迎えたのに合わせ『古希祝の会』と位置付けて、平成 24 年 11 月 9 日『新宿サミットクラブ』にて開催した。

体調を崩し欠席する者が増える中、行楽の秋という時節柄、夫婦で『海外旅行中』を理由にする者も少なく、古希とは言えまだまだ若い者には負けな

との気概に満ちた仲間達。恩師の大久間慶四郎先生は80歳半ばのご高齢ながらお元気で、上総一ノ宮から都心へ、しかも夕方の開催という事で今回は参加叶わず残念でした。御多分に洩れず出席者の中にも『老々介護』で日頃ご苦労されている者も多く『辛い事、悲しい事を昔の仲間聞いてもらうことで辛さが半減し、元気を貰える』とクラス会も昔を懐かしむ会と併せての効用を実感した会であった。

今後も毎年開催、昼間の開催を考える事で、現在少年野球の監督を務め日頃大声を張り上げている高杉君の『一本締め』で皆の健康を祈念し散会した。

(世話役：石田 勝教・記)



昭和 41 年卒 3組クラス会

平成 24 年 11 月 18 日（日）に大塚「ホテル・ベルクラシック東京」で独協 3 組のクラス会を開きました。昨年は 20 年以上ぶりに開催し、毎年やることに決めましたが、今年は 3 組だけでなく他クラスからも出席希望があり、3 年間担任であった横山先生を含めて 20 名の参加者となりました。横山先生の喜寿を祝い、記念品をお贈りしたりして 3 時間があっという間に過ぎました。来年は中学卒業から 50 年になりますので、できるだけ多くの方に参加していただき盛大なクラス会にしたいと思いますのでよろしくお願いいたします。

(渡辺 岳・記)



昭和 42 年卒 O B 会

平成 25 年 2 月 15 日、昭和 42 年高校卒 O B 会の新年会を、スーパードライ有楽町店にて行いました。

本会は、還暦を機に平成 20 年、獨協高校及び椿山荘で同窓会を行なった際の幹事が中心となり年 6 回程度懇親会を行なっているもので、25 名位のメンバーのうち毎回半数程度の出席があります。

メンバーは、昨年獨協学園の同窓会長に就任した浅野一君をはじめ、中学入学・高校入学、ドイツ語クラス・英語クラスの分け隔てなく集まり、場所はアサヒビール O B の須藤明弘君にご足労願ひ、アサヒ系列のレストランにて行なっています。

話題は学生時代の思い出、現在の仕事、自身の健康、はては子弟の結婚の話題などで毎回盛り上がっています。

過去、メンバー有志で伊豆へ旅行しましたが、今度はドイツに行くべく、計画を進めているところです。

(野澤 正・記)



山田直己先生を囲んで（昭和 49 年卒有志）

平成 25 年 3 月 9 日、椿山荘にて歓談致しました。

山田先生が国語教諭として着任されたのは 1970 年 4 月、我々が中学 3 年の時で同年 11 月には三島由紀夫事件が起きた年です。

当時歳の差わずか 7 歳の山田先生に、正に兄・弟のような愉快的時間を過ごさせて頂いた一方、情熱的な叱責を多くの生徒が頂き、紳士道の基礎を叩き込まれました。鉄道研究会発足時には懇願して顧問をお引き受け頂きました。模型・写真と遊びの要素しか考えていなかった我々は、山田先生のご指導のもと、「鉄道を通して社会研究を行う」との命題をきっかけ、毎年学園祭のテーマに沿った夏季取材合宿を先生と過ごしました。

この度は、短い時間でしたが当時を楽しく思い出し、談笑しました。現在も歳の差は 7 年のままです。…

山田先生は今日、成城大学でご活躍中です。

今回はクラス会を超えて有志が集いました。今後とも定期的に会合を重ねて行きたいと考えています。奮ってご参加ください、ご連絡をお待ちします。

滝沢弘明 (S 49 卒) 090-1538-6810
mo43502@na3.fiberbit.net

沖山秀司 (S 49 卒) 090-9310-1553
h-okiyam@fk9.so-net.ne.jp

(沖山 秀司・記)



平成 18 年卒 志 村 会

昨年の 12 月 21 日 (金) に池袋にて毎年恒例のクラス会が開かれた。参加者は先生を含めて 10 名。忙しい時期にも拘わらずよく集まったと思う。例年通り大盛り上がりで、幹事としてはとてもうれしい。そんな中、もっと多くのメンバーが参加しやすい時期はいつなのかということが話題にあがった。たしかに、12 月是一年でもっとも忙しいので、時期を変えた方が参加者は増えるかも！などと話していたのだが、結局のところ、別の時期にやっても、12 月になったらクラス会で忘年会やりたくなるからこのままでいいし、むしろ年二回にしたいという意見に行き着いた。みんなの仲の良さに幸せを感じたクラス会であった。

次回はもっと多くのメンバーが参加できることを祈って。

(幹事：吉川・記)



平成 22 年 (23 年) 卒 成人を祝う会

平成 25 年 1 月 14 日、成人の日に椿山荘・アザリアにて、“平成 22 年度卒業生 成人を祝う会”を開催させていただきました。卒業生の他、在学中に御世話になった学年会の先生方を招待し、約 140 名程の規模での会となりました。当日は大雪の為、残念ながら急遽来られなくなってしまった者も居ましたが、沢山の同期が会場まで足を運んでくれました。卒業から 2 年が経とうとしていますが、つい昨日のこのように思い出すことができる 6 年間の学生生活、懐かしい思い出話に花が咲き、同期のスーツ姿に以前の学ラン姿の面影を見ることができました。皆思い思いの時間を過ごし、御来場下さった先生方にも暖かい御言葉を頂きました。“獨協らしさ”、“男子校らしさ”を思い出させてくれる会となり、次回の再会を誓い閉会致しました。渡辺卓を中心とした有志の幹事 6 名 (渡辺、久原、湯沢、安藤、江連、葛原) による呼び掛けから始まり、多くの同期卒業生や先生方の御協力のもと、会を開くことができ、本当に感謝しています。この場を借りて御礼申し上げます。

(葛原 知史・記)



剣道部OB会 獨協戸隠会

当会は故神田直人先生の強い要望で 15 年前に設立され、剣道部のサポートとOB同士の親睦を深める目的で活動してまいりました。去る平成 25 年 3 月 17 日、ホテルローズガーデン新宿にて総勢 26 名が出席し、総会が開催されました。

総会は下條氏 (S 52 年卒) の司会により楽しく進められ、設立時から当会を支え頂いている山口会長 (S 46 年卒) のご挨拶、続いて居合道界の重鎮でありOB最年長の日名子氏 (S 45 年卒) による乾杯で始まりました。

総会にお招きした顧問の鳥山先生からは現剣道部の状況をご報告頂き、そして監督の斎藤師範から「伝統

校とは大会で優勝する学校ではなく先輩から後輩にしっかりとその志を継いでいける学校のことであり、とOB会の重要性についてお話を賜りました。

宴会では出席者全員に思い出話や近況報告をして頂きました。8年間剣道部監督をされた新井氏（S 49年卒）には当時の剣道部の様子を語って頂き、会長と同期の山崎氏（S 46年卒）は現在、居合道場を開いておられるとのこと、また大学院でも剣道を継続してきた山本氏（H 19年卒）や、40代過ぎてから剣道に復帰し日々稽古に励んでいる方など剣との関わりを持たれているOBが多くおられました。最後に六段を目指し稽古を続けておられる佐久間氏（S 50年卒）による三本締めによりお開きとなりました。残念ながら欠席されたOBの皆様、次回のご参加をお待ちしております。（大宅 正起・記）



日本大学松戸歯学部 獨協会

去る3/9に十数年ぶりに日本大学松戸歯学部獨協高校及び埼玉獨協高校卒業生の会（以下、日大松戸獨協会）が日暮里ホテルラングウッドにて開催され、OB 16名・学生5名合計21名の参加のもと楽しいひと時を過ごしました。新入生が二人おり、四月に入学し翌年の三月に新歓といういかにも獨協らしい集まりとなり、母校松戸で研究職に就いておるもの、開業医、勤務医、研修医、歯科大生と立場はいろいろですが、歯科という共通の職をセレクトした者が集いおおいに語り合いました。

また、本会は現在把握しているだけで70人以上の大所帯なので、とりあえず役員を以下のように決めました。世話人代表：西尾 由恭、世話人：嶋谷 豊（松戸8期）・秋山 龍平（以下・松戸9期）・小俣 裕昭・小生（全員S 53獨協高校卒）事務局：岡田 裕之（松戸11期）・市川 勝一（松戸28期）

なお、本会においては通信連絡をなるべく簡略化すべくメール通信にて行ないたいと思います。本会の

連絡や名簿希望の方は、岡田 裕之（okada.hiroyuki@nihon-u.ac.jp）または市川 勝一（2f-shou1chi-2f@jcom.home.ne.jp）までご連絡下さい。（西派 由恭・記）



昭和50年卒 さいたま目白会

平成24年5月31日、大宮パレスホテルにて第4回さいたま目白会が開催されました。この会は獨協高校の卒業で埼玉県内の開業医ないし勤務医を対象に病診・診診連携と親睦を目的にした学術講演会です。基本的に同窓生に講演をお願いしていますが、今回、「過活動膀胱」がテーマでしたので県内には泌尿器科の同窓生はいなかったため、東京で開業しております沖守 先生（S 51年卒）にご講演をお願いしました。わかりやすく、明日からの診療にすぐにでも役立つ話で大変勉強になりました。また東京から谷田貝茂雄先生（S 51年卒）も急遽ご参加いただきました。講演会後の情報交換会では、専門が異なる上世代を超えた意見交換を行い大変有意義な会になりました。

主な参加者は、代表世話人の寺師義典（昭50年卒）、世話人の田中正顕（昭53年卒）、原正彦（昭48年卒）、菊池崇知（昭50年卒）、島田裕司（昭52年卒）、成田亨（昭53年卒）、大熊一成（昭53年卒）、丸山泰幸（昭59年卒）（敬称略）です。

今後も継続していきますので、お近くの同窓生は是非声をかけて下さい。（文責・鈴木義信（昭50年卒））



目 白 だ よ り



平成 25 年度大学別合格者数 (推薦者も含めた延べ人数・平成 25 年 4 月 21 日現在) 進路指導部

<国公立大学>					
東京大学	2	青山学院大学	14	聖マリアンナ医科大学	2
大阪大学	1	上智大学	12	昭和大学	2
東京芸術大学	1	専修大学	12	金沢医科大学	2
東京海洋大学	1	國學院大学	10	杏林大学	2
東京工業大学	1	東京電機大学	8	日本歯科大学	2
東京学芸大学	4	成城大学	8	玉川大学	2
筑波大学	1	駒澤大学	7	帝京科学大学	2
千葉大学	4	成蹊大学	7	東京薬科大学	2
信州大学	1	帝京大学	7	文教大学	2
山梨大学	1	千葉工業大学	7	武蔵野美術大学	2
琉球大学	1	北里大学	6	明海大学	2
首都大学東京	1	武蔵大学	6	立正大学	2
防衛大学校	2	東京都市大学	5	ものつくり大学	2
小計	21	東邦大学	5	岩手医科大学	1
		慶應義塾大学	4	麻布大学	1
<私立大学>		桜美林大学	4	近畿大学	1
獨協大学	16	工学院大学	4	愛知医科大学	1
獨協医科大学	6	大正大学	4	神奈川工科大学	1
日本大学	35	東海大学	4	関東学院大学	1
明治大学	26	埼玉医科大学	3	京都造形芸術大学	1
法政大学	26	明治薬科大学	3	国際医療福祉大学	1
早稲田大学	26	亜細亜大学	3	埼玉工業大学	1
中央大学	24	関西大学	3	札幌大学	1
立教大学	21	東京造形大学	3	聖学院大学	1
明治学院大学	21	東京農業大学	3	洗足音楽大学	1
東京理科大学	20	神奈川大学	3	拓殖大学	1
東洋大学	19	城西大学	3	多摩美術大学	1
学習院大学	16	国土館大学	2	千葉商科大学	1
芝浦工業大学	15	高千穂大学	2	東京工科大学	1
		日本歯科大学	2	東京歯科大学	1
				日本薬科大学	1
				日本体育大学	1
				日本社会事業大学	1
				明星大学	1
				桐朋学園大学	1
				南山大学	1
				二松学舎大学	1
				麗澤大学	1
				鶴見大学	1
				名城大学	1
				小計	488
				<海外大学>	
				LAKELAND COLLEGE	
				JAPAN CAMPUS	1
				小計	1
				<専門学校>	
				東京 YMCA 国際ホテル	1
				ヒューマンアカデミー	1
				日本動物専門学校	1
				小計	3
				<就職>	
				東京都	1
				小計	1
				合計	514

◆ 193 名を送り出す 獨協高等学校卒業式

第65回獨協高等学校卒業証書授与式が3月10日、寺野彰理事長、ドイツ大使館文化部長マリー・ルイーゼ・ペンター氏、山田恒久獨協大学法学部長、永井伸一前校長、新井嘉昭後援会副会長、鈴木一郎PTA会長、竹内文生同窓会副会長らの臨席のもと100周年記念体育館で行われた。

渡邊和雄校長は式辞の中で「人を幸せにすることによってできる、幸せな人で満ちた世の中、それだからこそ自分がより良く生きることのできる世の中を作るという考え方をものの見方の中心に置くと進む方向を誤ることはありません。」と語りかけた。

浅野会長からは卒業生全員に卒業記念品として卓上時計が贈られた。

◆ 216 名の新入生 獨協中学校入学式

平成 25 年度の獨協中学校入学式が 4 月 6 日に行われた。渡邊和雄校長は式辞の中で「社会のリーダーとなるために基本ともなるべき、素養、価値観、行動原理を獨協での 6 年間で身に付けてもら

いたいと思います。その折に基本となるのは「支える」という考え方です。支えるというのはその中であって、自分に都合の良いようにふるまうのではなく、相手のことを考えて行動するということです。皆さん一人一人がそのように考えるならば、皆さんの周りにいる人すべてがお互いを支えあうような生き方をするようになります。そして、皆さんもその中で、生きることができるようになります。そうした人たちが集まってできる社会こそがこれからの社会です。」と呼びかけた。新入生を代表して永島力輝君の希望あふれる宣誓があった。



◆ 獨協中学・高等学校人事

退任	小林 敦 (国語科)
	吉 積 和 美 (国語科)
新任	河 野 一 郎 (事務長)
	藤 田 麻友美 (英語科)
	長谷川 美 奈 (国語科)

同窓生の皆さんへ

同窓会執行部

会費納入のお願い

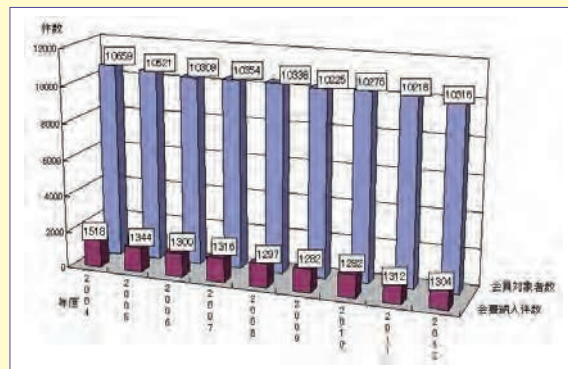
会費納入率が低迷しています。是非、同窓会費を納入してください。

同窓会活動資金のほとんどは、会員からの同窓会費と新入生からの納付金により賄われていますが、依然として同窓会費納入率が1割程度と低く、同窓会活動に支障をきたしています。

会費未納者がこのままで推移するようであれば、活動資金が減少していくことが見込まれます。

また納入者のなかには会費未納入者にまで会報を配布することに不満の声がないわけではありません。その打開策として、現在未納者への独協通信秋号の送付を見送るなどの案も検討されています。

つきましては、会費納入を再度お願いするとともに、今後の会報の送付方法などにつきまして皆様のご意見を獨協同窓会事務局までお聞かせください。



同窓会活動資金拡充・支援のための寄付のお願い

同窓会では、緊縮財政に務めまた会費納入率の改善に向け努力しているところではありますが、周年行事に当たり学校からも奨学金への協力を求められるなど、財政的に厳しい状況となっています。

同窓生の交流の場として同窓会を発展させ、さらには母校の発展のための活動へも寄与していくべく、基本財産をはじめとする財政基盤の拡充を図っていきたく考えています。

つきましては、同窓生各位から寄付金を募ることとしました。是非とも奮ってご協力いただきたく思います。振込先等は、獨協同窓会事務局までご連絡ください。

獨協同窓会事務局 TEL・FAX 03-3946-6352

獨協同窓会キャンペーン

そうだ 獨協、行こう!!

獨協ホームカミングデー

獨協ホームカミングデー
チャンスは年に2回です。

★ 獨協同窓会総会・懇親会 …… 6月15日(土) 午後5時より
今年還暦を迎える昭和47年卒大集合
柔道部のOB集まれ

★ 獨協祭 …… 9月21日(土)、22日(日)
同窓会も獨協祭に参加しています。ぜひ、同窓生の部屋へお越しください。

詳しくは、獨協同窓会ホームページ (<http://www.dokkyo-mejiro.com/>) をご覧ください。

獨協中学・高等学校PTAより「獨協祭・バザー用品ご寄付のお願い」

PTA会長 鈴木 一郎

昨年は多くの同窓生の皆様より、獨協祭・バザーにご協力をいただきまして、誠に有り難うございました。皆様からのご提供品の数や種類も年々増えており、おかげさまで例年以上の収益をあげることができました。また、収益金はすべて子供たちのために有効に使わせていただきました。

さて、今年も9月21日（土）・9月22日（日）の日程にて、獨協祭が開催されます。PTAでは、昨年に引き続き同窓生の皆様に獨協祭に参加していただき、更にバザー用品のご寄付ならびにご提供もお願いしたいと考えております。

バザーの収益金は、学校の施設改善費の一部ならびに学友会への補助金としてクラブ活動等の活性化に役立てられています。皆様には、後輩である在校生のために、まだお手元に眠っているお品物がございましたら、下記要領をご参照のうえ、ご提供下さいますよう重ねてお願い申し上げます。

また、獨協祭ならびにバザーにも、ぜひ一度遊びにいらしてください。在校生、PTA委員一同、心よりお待ちしております。

記

1. バザー用品受付期間とご提供の方法

- ・ 9月2日（月）～9月20日（金）
- ・ 宅急便にて下記迄お送りください。（元払いでお願い致します。）
〒112-0014 文京区関口3-8-1 獨協中学・高等学校「PTA厚生委員会」
TEL 03-3943-3651
- ・ 直接学校へご持参いただく場合は、主事室前廊下で受付しております。
- * お問い合わせ先 事務・淀縄（よどなわ）まで（ロックアウト期間中の8月を除く）

2. ご提供品について

- ・ 新品もしくは未使用のものをお願い致します。
- ・ 会社名などが入っているもの、試供品・景品・粗品などはご遠慮ください。
- ・ 食品は賞味期間に余裕があるもの、未開封のものをお願い致します。
（手作りのお菓子は、焼き菓子に限らせていただきます。獨協祭前日または当日のみの受付とさせていただきます。）

平成 25 年度
獨協祭が開催されます
9月21日(土)～22日(日)



同窓会は、今年も獨協祭に展示参加いたします。我が校は、今年の10月22日に130歳の誕生日を迎えます。これに因んで、今年のテーマは、校祖たる「品川彌二郎」と「創立130周年—その歴史を振り返って—」にいたしました。

獨協を卒業した者として、獨協史を改めて知る事は大切な要素ではないでしょうか。そして、教職員の方々のもとより、在校生・PTAの方々強いては学校説明会ブースにいらっしゃる多くの小学生と保護者の方々に、獨協の姿を見て知っていただきたいと思います。

同窓生の方々にご提案致します。皆さんの「…部OB会」「地域・職域のOB会」各々の活動を同窓会ブースで発表いたしませんか。昨年は、「ドクターズクラブ」「歯科医師獨協会」「サッカー部OB会」が出展しております。また、この日にクラス会・同期会等を開催し、待ち合わせに同窓会ブースをお使いになりませんか。是非ご検討下さい。役員一同大歓迎です。

編集後記

今年の桜開花は一週間程早かった。僅かの間に様々な天候を迎え、散って行った。今年の新入生は可哀想。入学時に、希望に満ちた将来を祝い迎えてくれる花がない。大先輩の入学時、やはり桜は優しく迎えてくれたのだろうか。そして、右手に桜花、左手にロールバール花。どんな想いで勉学に勤しん

だのだろうか。

我が校は130歳。大先輩たちの足跡を追い求めて獨協史の一端を垣間見る事は、我々後輩にとって大切な事かも知れない。今後も毎号、大先輩たちの回想記を掲載させていただこうかと…。先輩諸氏のご投稿を心よりお待ち申し上げます。（桜人）